

# RITA

利他の心へ

教育を変える

中華がぶもしろくなる

vol.

# 10

GLOCAL Philosophy

グローバル  
な学びと  
利他

利他のDNAを  
世界へ、  
そして未来へ



RITA  
LABO



# グローバルなプロジェクト学習が 「わたし」と「世界」をつなぐ。

新しい学習指導要領で掲げられる「社会に開かれた教育課程」について、  
文部科学省のSGH（スーパーグローバルハイスクール）として  
「グローバル」な教育実践を積み上げてきた立命館宇治高校の  
チャールズ・フォックス校長にうかがいました。

インタビュー／金井文宏（P1TA編集人）

**金井** 3年前にP1TA4号でこちらのIB（\*1）コースの2人に、CAS（\*2）の授業で取り組んだプロジェクトについて聞いたことがあります。その中で、彼女たちの「マイ・プロジェクト」の話とそのリフレクションが印象的でした。

**フォックス** IBコース、IMコースともに、プロジェクト学習を重視しています。今年度は「40億人のためのビジネスアイデアコンテスト」で、本校2年生のチームが組立式の健康をチェックしてくれる簡易トイレを提案し、優勝しました。発展途上国の40億人の人々の社会課題を考えて解決に導くプロジェクトを提案するコンテストですが、教室内で学

んだことを、自分たちで具体的なプロジェクトに落とし込んで、学校外の現実世界と関わっていくわけです。賞金は100万円あり、これを元手にプロジェクトを始めます。

**金井** 先日、その5人からラオスのプロジェクトの話してもらいました（P5）。企画の段階から実施・リフレクションまで高校生が主導して取り組んでおり、先輩たちが始めた事業を受け継いで、毎年発展させていく持続性もありました。

**フォックス** それが中・高・大学の一貫校の強みであり、立命館大学へ進学した先輩のアドバイスもあって継続的に取り組むことができています。現地の人たちも持続的なプロ



プロジェクトとして意識してくれてい  
ます。このIMコースのプロジェクト  
は、文科省のSGHの認定を受けた  
事業で、国の補助金も受けています。

### 学校全体での取り組み。

**金井** 他の取り組みとの関係はどう  
なっていますか。

**フォックス** IMコースの生徒は全  
員が2年次に海外の高校へ一人ずつ  
留学するのですが、留学先で英語で  
いちから人間関係をつくり、授業で  
は主体的に発表や議論をするよう  
になります。この留学そのものが、高  
校生にとっては大きなプロジェクト  
で、その経験をベースにラオスのプ  
ロジェクトに参画していきます。ま  
た、模擬国連にも参加しており、グ  
ローバルな社会課題について、各国  
の立場でディベートします。多様な  
国の立場を理解し、課題解決に向  
けて議論することで、国境を越えた認  
識を持つことができるのです。しか  
し、「模擬」の議論では、その時間だ  
け考えて終わりという限界がありま  
す。ラオスのプロジェクトは、現地  
の人と向き合って持続的に活動する  
というリアリティがあります。

**金井** 先生方はどういうワークをさ  
れるのでしょうか。

**フォックス** この事業をサポート

してくれるラオスのNGOとのコー  
ディネートをしたり、高校生たちの  
思考や行動へのファシリテートです。  
彼らは1年生の時に「地元発見」と  
いう自治の地域課題を探索型学習で  
学ぶ授業を受けており、自治の長所  
や短所を考えたり、課題に取り組み  
大人たちと接しています。

カリキュラムのアドバイザーには  
平等院の住職など地元の方々に入っ  
てもらっており、高校生たちは日本  
の地域を深く学び、その後2年次に  
海外へ行くことにより、「グローバル」  
な学習へと進みます。自治でもラオ  
スでも地域で活動する人々とコラボ  
レーションして学ぶのです。

一連のカリキュラムは、外国人教  
員、日本人教員、そして高校生が協  
働して創り上げていくものです。日  
本の公立高校では、外国人教員はア  
シスタントとして脇にやられること  
がありますが、本校ではダイバーシ  
ティを大切にして、外国人も日本  
も主体的・協働的にワークしていま  
す。現在ではIB・IMコースを超  
え、学校全体で教員がTOK (Theory  
of Knowledge / 知識の理論) を共  
有するとともに、CSL (Career  
Service Learning) という授業にも  
取り組んでいます。

### プロジェクト学習が成長を促す。

**金井** ここで学んだ高校生たちは、  
卒業後どのようにキャリアを創って  
いくのでしょうか。

**フォックス** 本校は中・高・大学と  
つながる一貫校なので、多くの生徒  
には「大学受験のために頑張つて勉  
強する」というモチベーションはあ  
りません。その代わり、プロジェク  
トの実践を通して社会と関わる学び  
を経験し、自分たちが成長している  
実感を持つようになっています。

この学びのモチベーションは、大  
学受験のように合格したことに満  
足して途切れるようなものではありません。大学入学後の学びのプロセ  
ス、つまり研究の企画↓文献調査や  
フィールドワーク↓プレゼンとディ  
スカッション↓協働して研究レポー  
トを完成させるという流れの中で、  
それを主導するリーダーシップを発  
揮してくれます。

本校の卒業生は、立命館大学やA  
PU (立命館アジア太平洋大学) を  
牽引するリーダーとなり、行動力が  
あると言われることが多いです。I  
Bコースからの海外大学進学も、学  
びが生かされるリベラルアーツ系へ  
の進学が多く、今年度はアイビー・  
リーグのブラウン大学やダートマス

大学へも進学しました。

**金井** 近年はAPUへ進学する生徒  
も増えているようですね。

**フォックス** 今年度は23人が大分県  
の別府にあるAPUへ進学します。  
APUは世界中から集まる外国人学  
生が半数を占め、寮の2人部屋では  
海外生と同居するなど、日常的な大  
学生活が異文化体験、多文化共生そ  
のものです。

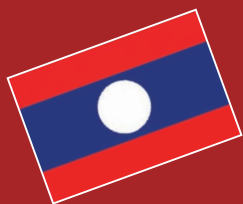
また、APUでは提携企業が研修  
に来てくれますし、ライフネット生  
命保険の創設者で世界史に造詣の深  
い出口治明氏が学長に就任したこと  
もあり、実業界とのつながりも強い。  
プロジェクトを起こしやすい環境に  
あります。今後は高・大連携を進め  
て、APUとともに文科省のSGH  
の次の段階の事業に取り組んでいき  
たいと思っています。

\*1 IB (国際バカロレア)  
親の職業の関係等で国を越えて進学する子どもた  
ちが継続的に学習できるよう、特定の国の教育政  
策に偏らない大学進学の国際統一カリキュラムと  
して、スイスに本拠地がある非営利法人国際バカ  
ロレア機構が提供する教育プログラム。立命館宇  
治高校IBコースでは、3つの中核であるTOK  
(Theory of Knowledge / 知識の理論)、CAS、E  
E (Extended Essay / 課題論文) 及び6つの科目群  
を通して、全人的な教育を行っている。また国語を  
除く全科目の授業を英語で実施している。

\*2 CAS

IBS中核の1。Creativity / 創造性、Action / 活  
動、Service / 奉仕の3つの要素で構成されたプロ  
グラムで、生徒たちがIBの学習者像の特質をプロ  
ジェクトとして実践する包括的な学びの機会となる。

# ラオスと宇治、 それぞれの「地域」に 関わることから、 利他の心を知る。



グローバルと「利他」①

立命館宇治高等学校 I・M コース 座談会



立命館宇治高等学校のIMコースでは、1年間の留学（カナダ、オーストラリア、ニュージーランド）や、一部の科目を除いて英語で行う「イマージョン授業」、そして課題解決型学習の3つの柱で、教育プログラムを提供しています。入学時からGLS（Global Leadership Studies）という科目では、自国を見つめる、各界のフロントランナーと出会うなどの経験を積み、3年生では本格的にグローバル社会や地域の課題に対し、解決策を提案し実現していくグローバル課題研究に実践的取り組みます。

ここでは①Wakkaプロジェクト（タイ・ラオスの子どもたちの就学支援）、②ラオス教育支援プロジェクト、③宇治活性化プロジェクトの3つのグループに分かれて活動します。活動は数年にわたって先輩から引き継がれ、年々新たな課題に向き合いながら、生徒たちの学びも深化しています。同校のSGH（スーパーグローバルハイスクール）発表会を終えた生徒のみなさんに、グローバルな視点で学び、行動すること、利他の心のつながりについてうかがいました。

**金井** まずは自己紹介と今日のSGH発表会で印象に残っていることを教えてください。

**坂下** 私は宇治活性化プロジェクトについて、今年取り組んだ「キャンドルナイト」などをポスターにまとめて発表しました。学外の方がたくさん来られていましたが、自信をもって話すことができてよかったです。

**松元** 発表の司会を担当し、立命館宇治について英語で紹介しました。最初はドキドキして、緊張して速くしゃべり過ぎたかなと思っていましたが、周りの人から「ちょうどよかったよ」と言ってもらえてほっとしま

した。

**酒井** 「らおにん」という取り組みに関して、英語でポスターセッションを行いました。APUの方、他校の先生や企業の方、保護者の方に聞いてもらい、質問もありましたがなんとか乗り切れました。認められたような気がして嬉しかったです。

**丸野** 今後行く予定のカンボジア研修に関わって、現地の事業家の方とオンラインで会話する授業を見てもありました。2年生はみんな1年間の留学を経験して帰国しています。一人ひとり留学で違う経験をしていますが、3年生になり、一緒にアクションを起こすことにワクワク

感がありました。

**細見** 丸野さんと同じ授業で、私たちはカンボジアの事業家の方に企業名の由来などを質問しました。事前に質問を考えていたのですが、実際の場になるとあまり聞き出せず、いざやってみると難しいものだなと思いました。

**一人ひとりが外国で出会った「異文化」。**

**金井** ありがとうございます。では、今回の特集であるグローバルの話題には海外とのさまざまなプログラムがありますが、それらを通じてどの



座談会参加者：立命館宇治高校IMコース  
(向かって右から) 坂下夏帆さん(3年)、松元裕希さん(3年)、  
酒井太一さん(3年)、丸野泉紀さん(2年)、細見伊吹さん(2年)

聞き手 | 金井文宏 (RITA編集人)

コーディネーター |

浮田恭子 (立命館宇治高校SGH運営指導委員)

武部恵子 (立命館宇治中・高 主幹 国際教育担当)



ラオス、日本、タイ、フランスの4ヶ国の文化をグループ学習する小学生たち。

ような異文化経験をし、どう受けとめたかを聞かせてください。

**坂下** 私はオーストラリアに行きましたが、慣れるのにずいぶん時間がかかりました。ホストは中国系のファミリーで、学校も国際的でアジア系の留学生もたくさんいました。ここで「言語の壁」、それも英語ではなく、中国語やハンガルの壁にぶつかりました。彼らは母国語で会話するので何を言っているのかわからず、ずっと気になっていました。帰国直前になって「自分だけがわからない会話は嫌だ」と伝えたところ、「そう思っているんじゃないかと思っていた」と言われて。もっと早く思いを伝えるべきだったと少し後悔しましたが、最後は仲良くなれてよかったです。

また、ホストマザーは私の至らない点をズバツと指摘して、何度も注意するのは。よかれと思ってのことだとはわかるのですが、日本ではあまり経験したことがなく、こうした人間関係における「間の取り方」にも戸惑いました。

**松元** 私はラオス教育支援プロジェクトでラオスに1週間滞在しました。当初、ラオスの子どもたちは海外について学ぶ機会が少ないことや、積極性・協調性に課題があるのではないかと考え、これらを改善する授

業を小学校で行う計画を立てました。自分で絵を描き、そこに英語とラオス語を入れた手作りの教材も用意しました。でも、ラオスには読み書きが満足にできない子どもや、そもそも「書き言葉」を持たない少数民族の子どももいるのです。次回はそういうことも考えた教材づくりを企画したいと思いました。

私には「発展途上国の人は貧しくてかわいそう」という固定観念から、豊かな日本に生まれた私たちが助けるのは当たり前という感覚がありました。でも、村のお祭りに行ったら、古いけど観覧車が回っていたり、夜店があったり、みんなとても楽しんでる。『実は彼らの方が人生を楽しんでいるのでは』と思うこともありました。織物を織っている女性を訪ねた時には、「売りたい」という感じがなく、「働いてお金をもらうことが幸せ」という考えがすべてではないと気づきました。収入を増やし、経済成長を促すことが本当に現地の人たちの幸せにつながるのだろうか？ 本当に必要な支援とは何なのか？ 支援を「押し付ける」のではなく、正しいあり方を考えないといけないと感じました。

**酒井** 僕はカナダに1年間留学しましたが、文化の違いを一番感じたの

は学校のアクティブラーニングです。自分で資料を読み込み、意見をまとめて発表し、ディスカッションをする生徒主体の授業で、先生から教科書で教わり、テストされるといふ今までの日本での学びとはまったく違いました。カナダでは人の話を聞いて、そういう考えがあったのかと発見する機会が多く、他の人の違う価値観がどんどん自分の中に入っていくという実感がありません。

**丸野** 私もうオスに行ったのですが、発展途上国に行くのは生まれて初めてでした。SDGsの授業で学んでいたのですが、現地では松元先輩と違い、織物を「買って！買って！」と何度も言われました。お祭りに抱いたイメージも先輩とはちょっと違って、伝統的なお祭りなのに突然観覧車が出てきたりして、ちょっと奇妙に感じました。英語の授業では子どもたちに「英語が使えると世界が広がる」ということを感じてもらいたいと思っていました。

**細見** 私は「Wakkaプロジェクト」に参加し、支援によって学校に通えるようになったタイの子どもの家を訪ねました。その子は学校へ行くようになって、とても明るい性格に変わったそうです。その後、NGOの人と一緒にまだ支援を受けられ

ていない子どもの家にも行ったのですが、水道もガスもない家庭を実際に見たのは初めてでした。お父さんは出稼ぎ、お母さんはおらず、NGOの人が「次はこの子を支援する」と伝えると、おばあちゃんは「この子が学校に行けるようになる」と言って泣いていました。実際に支援が届き、それを人々がどう感じているのかを見て、やはり素敵なことだなと感じました。もちろん、本当に必要とされる支援を考えることもとても重要だと思います。

1年生の時には、GCP（グローバルチャレンジプログラム）で日・中・韓の3ヶ国の生徒が民主主義について議論するという場に出させてもらいました。それぞれの国の生徒がまず20世紀の年表を書いて話し合いをするのですが、起こった事実はいずれも受け取り方がまったく違うんです。私たち日本の高校生は現代史の勉強があまりできていないだけでなく、それをどう捉えるのかを話し合ったこともありません。一方で中国や韓国の生徒は自分たちの見解をしっかりと述べていました。とても厳しい体験でしたが、最後に「協力することが大事だ」と言ってくれて、とてもいい経験をできたなと思います。



世界地図で4ヶ国の位置を示し、各国の特徴をプレゼンする高校生たち。



IMコースのネイティブ教員による授業。

## プロジェクトを通して 見えてきたもの。

**金井** では、最後にみなさんがプロジェクトから学んだことを、「利他」という視点を入れて語ってもらえますか。

**細見** Wakkaprojectのたのめ募金を留学先のカナダでもやった時は、バイク・プロジェクト（自分で焼いたパンやクッキーを買ってもらう）だけでなく、輪投げをしてもらい、その景品に折り鶴を渡すといった工夫をしてみました。学校の先生が寄付をしてくださることもありました。実際に動いてみると、多

くの人が協力してくれてこそ実現できる取り組みなのだと思えました。

Wakkで集めた募金は公益財団法人際センターの「ダルニー奨学金」という、支援する子どもがはっきりしているところに届けるのですが、実際にタイに行ってお金を受け取って学校へ通っている子たちと出会えて、「やってよかったな」と実感できました。最初はIMの先輩から誘われたのがきっかけだったので、このような体験ができて、将来は世の中を良くすることに関わりたいと思うようになり国連で働けたらいいなと思っています。

**丸野** 「40億人のためのビジネスアイデアコンテスト」に参加した時に、ラオスでの経験が役に立ちました。支援とビジネスを掛け合わせるのには難しく、本当に必要な支援は何か、考える必要があります。ニーズをしっかりと把握することを考えるのははいけません。GLSではいろんな人と触れ合い、いろんなことを学びました。次はアクションを起こす番です。将来の夢で今の自分の気持ちに近いのは、細見さんと同じく国連で働くことでしょうか。

**坂下** 私は宇治の町おこしに参加しました。宇治は観光地で多くの観光

客が訪れますが、夜には神社も食べもの屋さんも閉まってしまいます。そこで、観光客が夜も宇治に留まれるようにしたいと、今年度は12月に「キャンドルナイト」のイベントをしました。

宇治には二つの世界遺産があります。平等院と宇治上神社です。この二つに挟まれた宇治川に「塔の島」という島があり、そこに300本のキャンドルを灯そうと企画しました。自分たちで許可を取ったり、資金集めのために広告を集めたり。当日はたくさん観光客の人が来てくれて、「楽しかった」「めっちゃきれい！」と言ってくれて、インスタにも載せてくれて嬉しかったです。この日のために1年間活動し、宇治の人たちとたくさん関わり、現実をリアルに学ぶことができました。市役所の方や大人たちがアドバイスをくれて、そういうコミュニケーションの機会を持っていただくのが私たちの収穫です。将来は観光学を勉強したいと思っています。

**松元** ラオス教育支援プロジェクトでは、8月・10月・12月の3回、9人ずつでラオスを訪問しました。8月にはアメリカ・イギリス・イタリア・ラオスの4つの国にまつわるものをカードに描いて、どこの国かを



宇治平等院前の宇治川の中洲に点灯されたキャンドルナイト。

考えてもらうことにしました。子どもたちは興味を持ってくれたのですが、本当にこの4つの国でいいのかという課題が残ったのです。イタリアのことは誰も知らなかったし、米軍の不発弾が多く残っているという

現実があったからです。

そこで、10月にはラオス・日本・タイ・フランスの4ヶ国に変更しました。例えば「ラオバーガー」というフランスパンを使ったハンバーガーがあります。フランスの植民地だった時代の名残ですが、ラオスが植民地だったことを知らない子どももいました。日本とタイはラオスと

同じ仏教国ということで選びました。日本の金閣寺のように、タイにも金ぴかの寺院があり、お寺を金で装飾する共通点があるんです。国境があっても共通点やつながりがあることを理解してもらいたくて。今後は気候やマナーを取り上げて、この授業をさらに発展させたいですね。こうした経験を通してわかったこ

とは、ラオスの子どもたちは海外にとても興味があるということ。インターネットも教科書もないので海外のことを知る機会がありません。先生はおっしゃっていましたが、プロジェクトの今後を考えると、文字の書けない子どもへの対応や、私たちが自身もラオス語を学ぶなど、思いつくことはたくさんあります。

日本人はお金に依存し過ぎではないでしょうか。ラオスではお金でなく、自分たち仲間で娯楽をみつけて楽しんでいました。将来はユニセフやNPO、ボランティア団体で働いたり教育にも関わりたいと思っています。

**酒井** 僕はラオスの農家の商品を日本で販売するチャンスをつくり、同時にラオスの就学資金援助をするというプロジェクトに取り組みました。2年前の先輩が始めて、活動は2年間行ってきました。まずはコーヒーなどラオスの隠れた名産を発掘します。最近では花から色素を抽出する「バタフライピー」というハーブティーが人気で、カルピスと混ぜて売りました。また、カトウ族の農家の商品を買って学園祭と地域のお祭りで販売しました。Wakkaプロジェクトと合わせて18万円ほどの収益があり、「ダルニー奨学金」に寄付できました。

ラオスの農産品の販売に参加した高校生たち。

と、ラオスの子どもたちは海外にとても興味があるということ。インターネットも教科書もないので海外のことを知る機会がありません。先生はおっしゃっていましたが、プロジェクトの今後を考えると、文字の書けない子どもへの対応や、私たちが自身もラオス語を学ぶなど、思いつくことはたくさんあります。



ラオス産のコーヒー豆を使う。

コーヒー豆は宇治橋商店街の「鄙庵」というコーヒーショップで販売してもらえようになりました。鄙庵さんは収益の8割を立命館宇治に寄付してくださっています。今後は実際にラオスのコーヒーを飲んでもらうことにも挑戦したい。同時にラオスの農村のことを知ってもらうための広報も行っていきたいですね。

自分たちが一方的に何かをするのではなく、ラオスの人にとって何が幸せなのかをちゃんと考えて活動しなければいけません。例えば、ラオスの人が手織りのものを作っている時の誇りや、ラオスの人はお金より家族と過ごす時間を大切にしているという価値観。そうしてラオスの人にとつての幸せとは何かを考えていきたいです。卒業後は立命館アジア太平洋大学に進学して、大学在学中に大型クルーズ船で3ヶ月ほど働きたいと思っています。



「バタフライピー」をカルピスと混ぜて販売する。

グローバルと「利他」②

立命館慶祥高等学校 Rコース 報告会

ニュージーランドをヒントに、  
北海道の人々に響く  
アイヌ文化の  
伝え方を考える。



立命館慶祥高校IR（インターナショナルリレーションズ）コースでは、「国際社会で活躍する力を養うため、世界で起こっている問題を学ぶ」科目が展開されています。中でもSGH科目である「国際社会」では、地元北海道のアイヌ文化の継承という課題についてグローバルな視点で学びます。特に本年は、東京オリンピックの開会式にアイヌ文化が取り上げられることが決まるなど、国の政策も大きく変わってきています。高校生たちはアイヌの言語を学び、アイヌの世界観を理解することからスタートしました。

「アイヌの研究から世界の少数民族問題まで学びの世界を広げる」この科目の目的は、「グローバルな社会における世界観を持ち、知識を深め発信すること」です。地元の身近な課題であるアイヌ文化との共生について、マオリ族など世界の少数民族問題の取組み方に学びながら、高校生が主体的に考え行動するプロジェクトがどう展開されたか、実際に参加した山口太一先生、江口明子先生、田中さや花さん、細川翔平君の4名に集まってもらいました。

**倉石** 優勝おめでとうございます。今日はアイヌ文化を通してみなさんが学んだことをうかがいたいのですが、まずはアイヌ文化に関心を持つきっかけについて教えてください。

**田中** IR（インターナショナルリレーションズ）コースでアイヌ文化を学ぶのは3年時からだというのを知っていましたが、個人的には『ゴードンカムイ』という漫画を読んで、もともとアイヌ文化に興味を持ち始めていました。この漫画でアイヌ文化の知恵を学び、北海道の歴史もわかりました。

授業では二風谷アイヌ博物館の芸員の関根健司先生がアイヌ語を教

えてくれたのですが、アイヌ語を学ぶ時間が楽しくて言葉も身に付きました。アイヌネイティブの人たちの昔の会話の録音を聞いて、アイヌ語が生きていた言語だったと知った時は感動しました。授業で多くのことを学んでからアイヌ文化の継承地、平取に行つたので、フィールドワークを楽しむことができました。平取の二風谷小では月1回アイヌ語の授業をやっており、平取高校ではアイヌ文化の調査活動が盛んでした。

**細川** 私は中学校から立命館慶祥に来ていて、高校入学までにアイヌ文化を学んでいました。中学2年の時の舞踏ワークショップにアイヌネイ

ティブの方が来ていて、アイヌの神話や楽器演奏を聴きました。小学校の時に習った歴史と違い、アイヌ側から北海道の歴史を見るといっても学びました。

IRコースのアイヌ文化について学ぶ授業では、多彩なバックグラウンドを持つゲストスピーカーが来てくださって、アイヌ文化についていろいろな考え方があり、カルチャーショックを受けました。

また、私たち男子二人は立命館のプログラムで、江口先生と一緒にニュージーランドの海側のフアカタニ（Whakatane）へ行き、インター

ナショナルリレーションズコースの3年生として参加しました。



SGH全国高校生フォーラムにて

(向かって左から) 前田色葉さん、田中さや花さん、尾澤峻太さん、細川翔平さん(全員IRコースの3年生)

座談会進行役 | 倉石寛(副センター長)、金井文宏(RITA編集人)



マオリ族の文化を身近に楽しく学ぶニュージーランドの学校。

ミデイエイト(中学校)のマオリ文化の授業を見ました。

**田中** SGH運営指導委員長の本田優子先生(札幌大学教授)が、ニュージーランドのマオリ文化の研修へ私たち女子2人を推薦してくれました。学年主任の先生の引率で、オネフェロ地区でマオリ文化のダンスやハカを行うグループである「カパハカグループ」の踊りなどを見ました。自分より小さな子たちがマオリ文化を学んでいるのを見て驚き、北海道に住んでいる自分も、地元の文化であるアイヌ文化を伝えていきたいと思いました。関根先生の授業では、アイヌ語を学ぶことによって生き物やモノを大切にするアイヌの思想も学ぶことができたと感じています。

**細川** 立命館中学でも3年生の時に2週間のニュージーランド研修があるので、そこではマオリ文化を一つの事例として少し学んだだけでした。でも、今回は5日間、マオリ漬け、というくらいで、本当に多くのことを学ぶことができました。

**田中** 今回行った学校は、日常生活でマオリ語と英語が混ざっているようなところだったんです。先生は「これを持ってきなさい」という指示を、英語とマオリ語で行います。しかも私はマオリの家庭にホームステイし

たので、本当に「マオリ漬け」という状態。将来、北海道の学校でアイヌ文化やアイヌ語を学ぶことが広まって、アイヌ語と日本語が混じり合うようになると、こんなイメージなのかなと体感できました。

### アイヌ文化を学ぶためのカリキュラムの工夫

**金井** 先生方はどんな考え方でカリキュラムを組み立てられているのでしょうか？

**江口** 立命館中学校では、「アイヌアートプロジェクト」という民間の団体と一緒に、版画や歌、踊りなどからアイヌ文化に触れていました。ヒストリーに注目するとネガティブな印象が強くなるので、公演やワークショップなどアートからアイヌ文化へ入っていくという活動をしている団体です。

IRでのアイヌの授業は週に1コマ、社会科の教員が担当しています。今年のIRコースの人数は少ないのですが、みんな関心が高かったです。授業では最初に歴史、次いで内閣官房アイヌ総合政策推進室の参事官に来てもらい、国の政策を学びました。その後、北海道博物館の先生にアイヌ文化を語ってもらい、アイヌ語の先生から言語を学びました。アイヌ

の歴史は私たちの負の部分の学びになり、それだけでは乗り越えられないものがあるので、まずはアイヌ文化からアプローチしています。

今年はいヌ語を重点的に学びました。アイヌ語は消滅危機言語で、きちんと喋れる方は5人ほどしかいません。アイヌ語を使える自分が楽しいと思える授業にしたいと、ニュージールランドのマオリ文化の学びを参考に、私たちも歌と踊りでいこうとしました。また、マオリ語だけで学ぶという「テ・アタランギ法」も参考にしていきます。ニュージールランドでは他にも、マオリの歌と踊りの自作自演の作品をスマホアプリで見

られるようにするジャイソン・キング教授（オークランド工科大学）の手法が面白かったですね。

来年は、アイヌ文化の再生に正面から取り組んできた萱野先生の事例を取り上げたいと思っています。

**金井** 実際に担当されている山口先生は、どのようなことを心がけているのですか？

**山口** アイヌ文化の授業は週1回で年間計23時間しかありません。その中で、前半はアイヌについての知識をしっかりとインストールすることを目指しました。自分自身が話を聞きたいと思うような外部の優れた専門家や実践者に学校に来てもらい、子

どもたちがちょっと背伸びをしないといけないようならうことにしたのです。

例えば、内閣官房アイヌ

総合政策室で政策を作っている参事官に

東京から来てもらう、アカデミックには北海道博物館の先生に喋ってもらう、地元の人々のアイヌのことは江別市の博物館の学芸員に話を聞く。こうした基礎的な学びを経た後、フィールドワークに入り、平取や阿寒湖のアイヌの人々を訪問してアイヌ文化や文化継承活動について学んでいきます。

その後、ニュージールランドでマオリ文化の継承の現場を訪れたことで、北海道におけるアイヌ文化についてグローバルな視野で考えられるようにしました。そのプロセスと成果を2018年度SGH全国高校生フォーラムで発表したので。

**江口** 同時に週4コマで1万字論文を仕上げる「課題研究」という授業があり、問題意識を持ち、課題を発



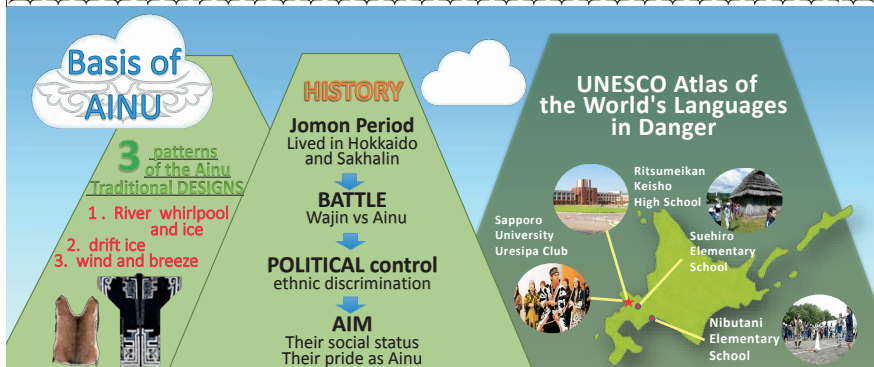
慶祥メディアセンターにあるアイヌコーナー。アイヌ学習の参考となる文献・資料・新聞切り抜きが展示される。

見して、主張をどう組み立てていくかを学んでいます。インタビューのやり方も身に付けて調査し、最後にレポートの作成とプレゼン。こうしたプロセス全体を学んだことも、SGHでの発表にとって大きな力となりましたように思います。

**山口** ただ、この授業はSGHとして学ぶだけではなく、「北海道が抱える課題」としてアイヌについて議論し、世の中に影響を与えられるようになりたいということを目標にしています。私自身、好奇心を持って学ぶ人間なので、高校生たちと一緒に勉強し、彼らとフィールドワークに出かけました。取り組みを始めた5年前には、アイヌの人々の住居（チセ）を訪ね、楽しく勉強させてもらったこともありま



(上) アイヌ研修で訪れた二風谷小学校にて、小学生とアイヌ語のゲームを行う。(下) 平取町立二風谷アイヌ博物館を訪れた2018年度のIRコースメンバー。



**Our Actions**

- Study in NZ**
  - \* SGH study trip \*
  - Learn about educational program of the Maori
  - \* Indigenous people exchange program \*
  - Learn Maori culture
  - Introduce Ainu culture
- In Class**
  - \* Guest speakers \*
  - \* Ainu language class \*
- Fieldwork**
  - \* Ainu museum \*
  - \* Nibutani Elementary School \*
  - Many Ainu people live there
  - Taking Ainu language classes

**Our Proposals**

To share the deep spiritual world of the Ainu.

**DESIGN**

- school uniforms
- wood carving art class

**FOOD**

- school cafeteria

**LIVING**

- Ainu language classes
- performance teams

SGH全国高校生フォーラムでは、特にデザインを重視したというポスターが好評だった。

**全国大会で優勝できた理由。**

金井 今回優勝した文科省のフォーラム(123校参加)では、アイヌ文化の学びをどう生かしたのですか？

江口 今回の発表会では、認知度が低いアイヌのことについて知ってもらうという方針で臨みました。審査する側からは発表方法やリサーチ手法についてサジェッションが来ていましたが、私たちはそれにこだわらず、アイヌのことをまずは知ってもらうためにポスターセッションで

はデザインに力を入れました。デザインで多くの人を惹き付け、高校生たちが学んだ知識や経験からアイヌ文化への理解を広げようとしたのです。私たちの基本的な考え方をアイヌ語で「ainu puri a=eraman」(アイヌに触れてアイヌを知る)と冒頭に

掲げ、最終的にはアイヌの衣食住を知ることにより、アイヌの精神世界も理解してもらうことを目指しました。細川 みんなで話し合って、衣食住について次のような提案をすることにしました。Designでは学校の制服の一部にアイヌの文様を取り入れ、文様自体に文化的な意味があることを知ってもらう。また、美術の時間にアイヌの文様を彫る。

Foodでは、学校の給食で1週間、アイヌ文化に即した食事を味わってもらうこと。「オハウ」と呼ばれる鮭を使った鍋料理や、山菜と油の和えものでポテトサラダのような「ラタンケブ」などをメニューに加え、アイヌが狩猟採集経済であり鮭や山菜などが食材になることを知るので

Livingでは、授業でアイヌ語を学んだり、アイヌのダンスチームを設けることを提案しました。

田中 北海道の子どもたちが小中学校で学ぶアイヌは、シャクシャインの乱など激しい戦いがあったために、「アイヌに対して申し訳ないことをした」という負のイメージがあるんです。だからこそ、身近な衣食住からアイヌ文化を知ってもらい、その奥にアイヌの精神世界があることを紹

介したかった。ニュージーランドでは、マオリなど少数民族の文化を広めるにはどうしたらいいのか、教育の観点からヒントをもらったので、それらをこの大会の提案に活かせればと思ったんです。

**江口** ラグビーのニュージーランド代表「オールブラックス」は、試合前に「ハカ」という舞を披露するなど、

マオリ文化が国の文化になっていきます。北海道ではアイヌと聞くとシャットダウンしてしまう人が多い中で、ニュージーランドのような教育普及の手法に学ぶことは有効です。

私たちの手法が思いのほか支持され、ポスターセッションで選ばれた後、最終上位4校まで残れました。他の学校は帰国子女が流暢に英語で

## アイヌ文化を 楽しく学ぶためには。

**倉石** みなさんは北海道の学校でアイヌ文化をどういう視点から学べばいいと思いますか？

**細川** 私は小中学校におけるアイヌの学習も、歴史だけでなく、衣食住からも学んだ方がいいと思います。シャクシャインの乱という用語を暗記して終わりというのは残念です。

**田中** そうですね。私も歴史でガチガチにやるのではなく、いろいろな考え方がありとわかれることが大切だと思います。ニュージーランドでは、

小学校の時から身近にマオリの文化に触れています。その後、マオリについて知りたい人は言語や文化を深めていけばいいし、学ばなくてもいい。自分が漫画でアイヌ文化と北海道の歴史を学んだように、こういうのが新しいスタイルじゃないかな。

**細川** 今年の1月にイギリスに行った時に大英博物館で「日本展」をやっていて、北海道のアイヌ文化が大きく紹介されていました。私たちももっとアイヌのことを知った方がいい。4月から京都の立命館大学へ進学しますが、「北海道にはアイヌという文化がある」と伝えていきたいと思っています。

**江口** ニュージーランドでは本当に楽しく、教育だとは思っていないようなんです。野外でダンスをしたり、寝っ転がって話し合ったり、そうやってマオリのことを身近にしていく。平取の二風谷小学校関根先生の授業では、アイヌ語で「大きな栗の木の下で」を歌ったり、「フルーツバスケット」のフルーツをアイヌ語にしたり、自然にしゃべれるようにしています。私には日本人ということ以外に文化的なアイデンティティが何もなく、アイヌの人々が自分たちの文化に誇りを持っている姿を見ると羨ましく感じますね。

**山口** 今年度は国のアイヌ文化への政策方針が明確になりました。2020年には白老町に国立のアイヌ博物館ができ、東京オリンピックでもアイヌ文化を取り上げるようになっていきます。そうした流れの中で、私たちの取り組みはマスメディアに注目され、北海道新聞などで記事になりました。立命館慶祥のSGHでは「共鳴と創造マインドを育む」という目標を掲げていますが、それを少しは達成できたのかもしれませんが、今後は授業の継続可能性を追求し、IRコースだけでなく、学校全体のカリキュラムとして位置付けていければいいですね。



立命館慶祥高校の教室にて。アイヌ学習を担当する左が江口先生、右が山口先生。

課題研究について語るというスタイルでしたが、立命館慶祥チームは、デザイン重視のポスターとともに、1年間の学びの流れの中で衣食住の提案をするというユニークさが評価されたのだと思います。質疑応答でも慶祥チームは質問に対して4人が協働し合っており、高レベルのチーム力もアピールできたでしょう。

# B

B O O K

## ビールの売り子の働きぶりを通して「生き方」「考え方」などの稲盛フィロソフィを学ぶ。

主人公は野球場でビールの売りのアルバイトをする女の子。売り上げをめぐる競争や同じ職場の女子同士の友情やぶつかり合いから、働くことの意味や、他人そして自分自身とどう向き合っていくかを描いたドラマです。

主人公がだんだんと慣れてきて、売り上げも伸びてきたある日、ビールを樽に補充する場面で、不慣れな子がもたもたしているとイライラしてしまふ。「せっかくだい調子なのにこの人のせいで……。ありがちな感情の揺れが、無理なくストレートに描かれています。

本当に誰でも日常によくある感情の噴出ですが、そこから仲間と働くことの意味や仕事の喜びがどこにあるかを考えていきます。お

上から目線ではなく成長過程に身を置く女性自身を通じて、「周りに認められる」と「充実した人生を送るには」といったテーマが描かれていきます。テーマは全部で7つ。特に秀逸なのは、漫画の途中に挟み込まれた小さなコラム風の言葉。大ヒットした『君たちはどう生きるか』にもあった手法ですが、こちらの方が実践的で、意味を深めて理解していけるように思えます。合評会や読書会向けの1冊です。

(RITLABO副センター長 倉石寛)



『まんがでわかる 稲盛和夫フィロソフィ』  
(稲盛和夫監修・小山西梨子作／宝島社)

## 編集後記

立命館宇治高校の取組みは、ラオスの農村と宇治の商店街を結びプロジェクトに象徴されるように、経済格差やフェアトレード、開発教育について、高校生たちが主体的に「当事者意識」を持って考え行動するようになっていく教育実践である。武部先生をはじめとする教員が担ったのは、高校生へのファシリテーションと事業企画のための外部とのコーディネートがメイン。彼らは先輩から受け継いだプロジェクトに参画して、自分たちの課題設定をして、課題解決に向けてアクションを起こした。またその成果についてリフレクションを行うことで、自らの生き方を考え、将来のキャリアに思いを巡らせている。

立命館慶祥高校のアイヌ文化継承の取組みは、本年度の全国SGHのフォーラムで最優秀賞に選ばれた。その鍵となったのはアイヌの人々、アイヌの文化や言語と丁寧な接することにより「当事者意識」が養われたことにある。最終段階で、マオリ文化と共生するニュージーランドの少数民族政策を現地のフィールドワークで学び、アイヌ文化と共生する北海道の教育の在り方を考え提案した。担当教員の山口先生、江口先生も、北海道の文化を豊かにしてくるアイヌ文化という捉え方をし



て取り組んでいるように感じられた。

教科横断的な「総合的な学習」の中でも、地域をベースにグローバルな視野を持つプロジェクト学習は、高校生に「当事者意識」を育み、新しい学習指導要領の「主体的・対話的な深い学び」のコアカリキュラムとなるものである。このような授業を作り上げるためには、文字通り「社会に開かれた教育課程」として学校の外へ出て、広く社会で活躍する大人たちと連携することが必要である。今回取り上げた2校の教育実践は、新しい時代の教育を予感させるものである。(RITLABO編集人 金井文宏)

RITLABO は、稲盛経営哲学研究センターの教育実践研究部門として、利他の心を軸に、教育の未来を切り拓きます。

利他ラボ  
RITLABO

<http://www.ritalabo.jp>



お問い合わせ: [contact@ritalabo.jp](mailto:contact@ritalabo.jp)

facebook

rita labo 検索

発行: 立命館大学 OIC総合研究機構 稲盛経営哲学研究センター RITLABO(リタラボ) 大阪府茨木市岩倉町2-150 立命館大学 大阪いばらきキャンパス

編集人: 金井文宏 デザイン: 坂本佳子、齋藤直己 2019年3月31日発行